日田市埋蔵文化財調査報告書第37集

今泉遺跡

2002年

日田市教育委員会

吹上台地を望む

遺跡全景

序　文

岳林寺は、康永元年（1342年）に元の渡来僧明極楚俊を開基として、大蔵永貞によって建立された臨済宗寺院として知られ、岳林寺収蔵庫におさめられている数々の仏像群や文書類などから、当時の面影が忍ばれます。

さて、今回報告いたします今泉遺跡はこの岳林寺に程近く、江戸時代の絵図からは、当時この遺跡を含んだ広範囲に寺域が存在したことを示しています。また、弥生時代の首長墓が発見された吹上遺跡のある吹上台地の下にあたります。遺跡からは、弥生時代から中世までの様々な遺構や遺物が発見され、弥生時代から古代までの集落が、沖積地上に展開し、広範囲に及んでいたことが明らかになりました。

このたび発行いたします本書が、埋蔵文化財の普及及び、郷土の歴史を知る上での一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業、報告書作成にあたってご協力を頂きました皆様方に対し、心より感謝を申し上げます。

平成14年3月

日田市教育委員会
教育長　後　藤　元　晴

例　　言

1. 本書は日田市都市計画道路北豆田三郎丸線交通安全施設等整備事業に伴う今泉遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、下村智先生（別府大学助教授）に現地においてご指導をいただいた。
   また、市土木課や地元の方々には現場作業にあたり、様々な便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載した遺構写真は、担当者によるものを、空中写真については、有限会社スカイサーベイ九州の委託によるものを使用した。また、遺物写真については、雅企画有限会社　長谷川正美氏に撮影委託したものを使用した。
4. 発掘現場での実測作業は担当者が行ったほか、有限会社雅企画　森山敬一郎氏、財津真弓氏の委託による。遺物実測については担当者が行った。
5. 遺構・遺物の製図は各担当者が行ったほか、有限会社雅企画　財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
6. 図版中の番号は全て挿図番号と一致する。
7. 遺構から出土した遺物及び図面については、すべて日田市埋文化財センターにて保管している。
   本書に使用した遺構図の方位についてはすべて磁北である。
8. 本書の執筆・編集は行時と協議のうえ、渡邊が行った。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の経過 …… 3
第３節　調査組織 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の内容
第１節　調査の概要 …… 7
第２節　遺構と遺物 …… 7
１）竪穴住居跡 …… 7
２）溝 …… 11
３）その他の遺構 …… 13

第Ⅳ章　まとめ …… 15

挿図目次

第１図　市道北豆田三郎丸線路線図（1/5,000）
第２図　１、２次調査区位置図（1/2,000）
第３図　１次調査区トレンチ土層図（1/40）
第４図　２次調査区全体図（1/500）
第５図　１、２次調査区出土遺物実測図（1/3）
第６図　３次調査区位置図（1/2,000）
第７図　遺跡分布図（1/20,000）
第８図　遺跡全体図（1/200）
第９図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）
第10図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）
第11図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）
第12図　１号溝実測図（1/40、1/80）
第13図　１号溝出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4）
第14図　２号溝実測図（1/40、1/80）
第15図　２号溝実測図（1/4）
第16図　３号溝実測図（1/40、1/80）
第17図　３号溝出土遺物実測図（1/3）
第18図　１号埋甕実測図（1/30）
第19図　柱穴出土遺物実測図（1/3、1/4）
第20図　その他の出土遺物（1/4）

図版目次

図版１
①調査区全景（東から）
②１号竪穴住居跡
③１号住居カマド土層
④２号竪穴住居跡
⑤２号竪穴住居遺物出土状況
図版２
①２号竪穴住居跡土層
②１号溝
③１号溝北壁土層
④１号溝南壁土層
⑤２号溝
⑥２号溝土層
⑦３号溝
⑧３号溝土層
図版３　遺物写真①
図版４　遺物写真②
図版５　遺物写真③

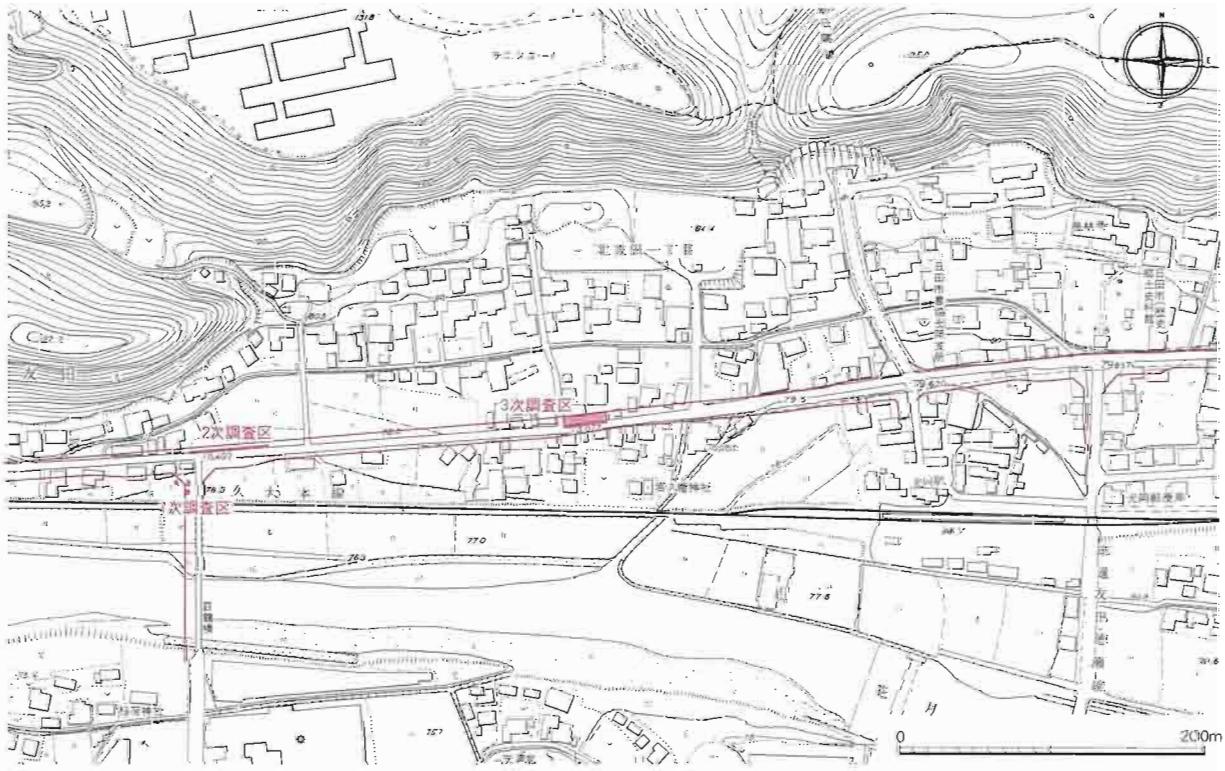
本文写真目次

写真１　１次調査区調査風景
写真２　調査風景
写真３　１号住居跡出土土器
写真４　埋甕出土状況

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経過

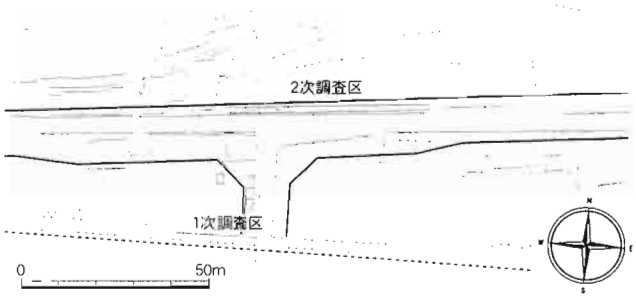
本遺跡の発掘調査は、三隈川の支流である花月川沿いを東西に並走する都市計画道路北豆田三郎丸線道路改良工事（交通安全施設等整備事業歩道設置工事）に先立ち行ったものである。この道路建設計画については、市道平和通り線北豆田と国道 386 号線三郎丸を結ぶ総延長約 3.9km の補助幹線道路として、昭和 27 年に計画決定がなされた。うち、平成３年より北友田１丁目の総延長 428 mの区間が建設事業着手となり、照会文章が市教育委員会に提出された。これを受けて、市土木課と協議を行い、事業の進捗状況に合わせて事前の試掘調査を行うこととなり、平成６年度には今泉遺跡１、２次調査区の試掘・確認調査を実施した（第２図）。１次調査区では、開発区域内、及び遺構の広がりを確認するために入れた工事区域外の計３ヵ所のトレンチを設定して掘り下げ作業を行った（第３図）。その結果、数枚の水田層が確認され、それらの間層からは、古墳時代～中世にかけての遺物の出土が見られた。この結果、花月川の氾濫によって砂レキ層が堆積した上に、古代以降のある時期に水田開発が行われた状況が明らかとなった。また、同年度に行った２次調査区では、開発区域内に幅 3m 、長さ 53m のトレンチを設定し掘り下げ作業を行った。（第４図）その結果、調査区内からは多数の柱穴や溝などが発見された。遺構検出面の上には黒褐色を呈する包含層が堆積し、この中からは主としての古代～中世の遺物が出土した。なお、これらの遺構については、工事区域が現状道路を拡幅して行われ、調査対象地となるのは主に歩道部分であるため、遺跡の盛り土保存が可能であったことから、確認調査の範囲で留めることとなった。また、試掘調査の成果として記録し、今後の周辺開発等の参考とするため、トレンチ内より出土した主要な遺物については第５図に図示し、以下説明を加えることとする。



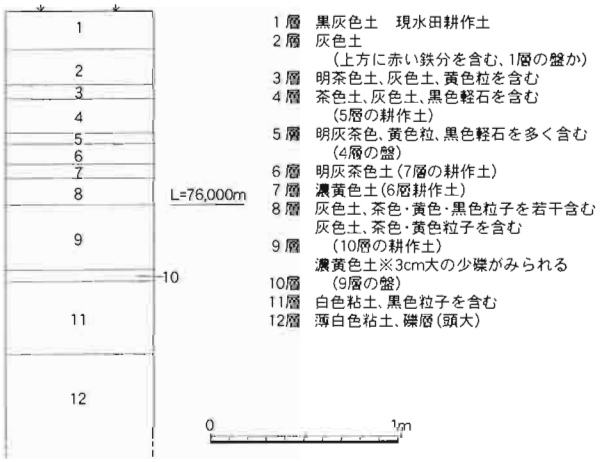
第１図　市道北豆田三郎丸線路線図（1/5000）

1次調査区から出土した遺物は1～5である。1・2はトレンチ上層出土。1は青磁椀の底部片。2は須恵器瓹である。3はトレンチ中層出土の須恵器甕の口縁部片。外面格子目タタキ、内面に青海波状タタキを施す。4・5はトレンチ下層出土。4は古代の土師器坏の底部。5は須恵器の高坏脚部である。

2次調査区から出土した遺物は6～16である。いずれも表土中あるいは包含層中より出土。6は須恵器蓋の破片で、内面回転ナデ、外面天井部に一部ヘラ切りが見られ、唯一古墳時代の遺物と考えられる。7は須恵器蓋の口縁部破片で、口縁部を嘴状に折り曲げる。8は須恵器蓋の破片で天井部に一部ヘラ切りが見られる。9は須恵器坏で、内外回転ナデ。10は須恵器高台付き坏で、内外回転ナデ。11は須恵器高台付き坏で、内外回転ナデ、底面ヘラ切りである。高台は一部外れているものの痕跡が残る。口縁部への立ち上がりはやや緩やかに弧を描く。12は須恵器高台付き坏で、内外回転ナデ、底面ヘラ切りである。13は須恵器高坏か。外面に突帯を持ち、内面にはハケが施される。14は須恵器甕の口縁部で、外面に沈線で区画された間に波状文を施す。内面にはハケが施される。15は土師器椀である。高台はやや長く、外に開く。復元底径は7.6cmを測る。古代後期の遺物であろう。16は中世後期の明代の染付けの皿で、高台を持つ。7～14は8世紀代の所産である。



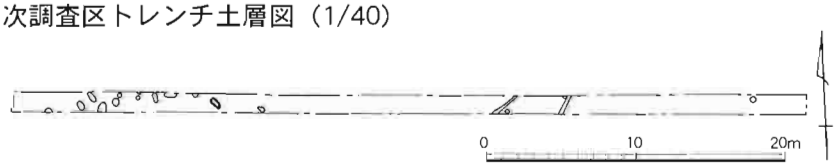
第2図　1、2次調査区位置図（1/2000）



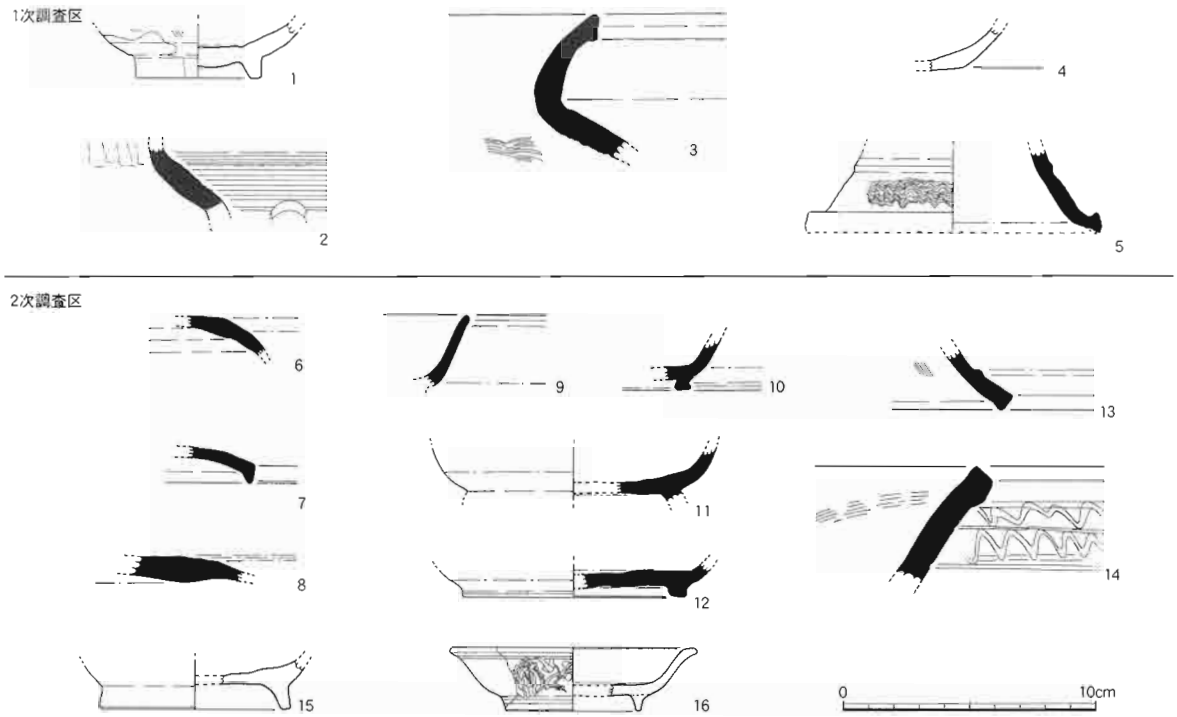
第3図　1次調査区トレンチ土層図（1/40）

その後、平成11年度には路線西部の三郎丸集落近くの試掘調査を実施したが、古代の遺物は出土したものの遺構の存在は確認されなかったことから、路線西部区域についての埋蔵文化財の調査については必要ないとの判断に至った。翌平成12年度には、平成6年度の調査区に近接する東側のこれまで工事が終了した区間との間で、用地購入が終了した区域についての試掘調

写真1　1次調査区調査風景



第4図　2次調査区全体図（1/500）

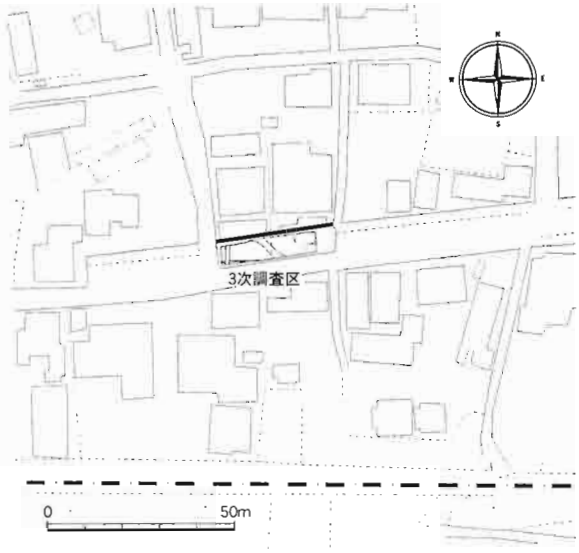


第５図　１、２次調査区出土遺物実測図（1/3）

査を実施した。その結果、古代から中世にかけての遺物とともに柱穴等の遺構の存在が明らかとなったため、この遺跡の取扱について協議を行った。この事前協議では現状での遺跡の保存が難しいとの結論から、対象地の用地購入が完了次第、本格的な発掘調査を実施することで合意に達していたが、その後、文化課の調査体制や土木課の用地購入及び立ち退きに時間を要した経緯もあり、開始時期が遅れ、平成 13 年 10 月 9 日から発掘調査に着手することとなった。

第２節　調査の経過

調査は、平成 13 年 10 月 9 日から開始し、まず、交通量の多い現状道路に隣接しているため、安全対策として交通誘導員を配置し、また調査区周辺にはバリケードを巡らせ、作業員の安全の確保に重点を置いた。その翌日から機械による表土除去作業に移っていったが、隣接する住宅と歯科医院への侵入路を確保するため、調査対象区域の東西、特に東側の侵入路に関しては医院への車両の出入りのために約 3 mほどの通路を確保し、また、対象区域の南北両側についても通行に支障を来たさないよう歩道部分として 1.5m 幅を確保することとなり、結果的に実質調査面積は約 200 ㎡と当初の予定より少なくなった。機械による表土除去・遺構検出では、遺構面までは旧住宅建築時の基礎の痕跡などが広く残っていたため、調査区東側の大部分はすでに削平を受けていた様子が伺えたが、西側ではあまり撹乱を受けておらず、比較的遺構はよく残っていた。その後作業員を投入し、これらの撹乱を除去する作業を行ったが、その過程の中で、調査区東側部分においても、撹乱層の下からは遺構のプランが検出されたことから、全体的な遺跡の状況は掴めることになった。その後調査は順調に進み、遺構の掘り下げを行った後、10 月 19 日には空中写真撮影を行い、翌 20 日には別府大学下村智先生の現地指導を頂いた。また、遺構実測作業は 10 月 11 日に基準点測量を完了した後、遺構の掘り下げ作業に平行して順次行い、10 月 25 日には全ての機材を撤収して調査を完了した。



第６図　３次調査区位置図（1/2000）

写真２　調査風景

第３節　調査組織

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（同教育長）

調 査 事 務　原田俊隆（文化課課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、島崎誠司（同主査）、園田恭一郎（同主任）、原田恭子（同臨時職員）

調　査　員　行時志郎（文化課主任、調査担当）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邉隆行（同主事、調査担当）

発掘作業員

穐本文雄・秋吉ミユキ・安心院照雄・猪熊ヨネ・伊藤暁子・後藤孝市・五反田静子・財津由太・財津利枝・高倉美利・高倉冨美子・高村笑美子・手嶋トシエ・筒井英治・本田忠勝・本田早苗・田中昇・中尾タマエ・平原知義・松岡初次・行村シズエ

整理作業員

伊藤一美・川原君子・梶原ヒトエ・鍛冶谷節子・佐藤みち子・吉田千津子

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

今泉遺跡は日田盆地北部を西流する花月川右岸の河岸段丘上に位置する。花月川は日田盆地北部の台地の裾を縫うように西に向かい三隈川と合流するが、この花月川の沖積作用によって形成された沖積地が、日田盆地東部の台地の裾部との間に長大に展開している。調査区は台地から派生する尾根筋先端が、花月川と接して遮ぎられている地点のやや上流に遡った沖積地に立地する。

背後に台地、目前に花月川を望み、ほぼ平坦地であるこの場所の周辺は、その豊かな環境のもと、様々な遺跡が展開している。背後の小迫原台地には縄文時代の落し穴が発見された朝日ヶ丘遺跡があり、吹上台地上には弥生時代中期の首長墓や弥生時代後期の環濠など、弥生時代全般を通して集落が営まれる吹上遺跡がある。これらの台地斜面には北友田横穴墓群が展開している。また、これらの台地と谷を一つ隔てた小迫の台地には弥生時代後期の環濠、古墳時代初頭の豪族居館、古代の建物群などが発見された小迫辻原遺跡があり、その隣には弥生時代後期から古墳時代の墓群が発見された草場第二遺跡、この小迫の台地の裾には弥生時代後期～古代にかけての集落が展開する本村遺跡などが見られる。また、花月川を挟んだ対岸の中洲状の沖積地には弥生時代から中世の溝が発見された郷四郎遺跡がある。花月川と三隈川の合流点付近には、古墳時代の鍛冶遺構、鍛冶祭祀遺構、中世の建物跡が出土した荻鶴遺跡があり、台地側には古墳時代後期の円墳である三郎丸古墳、独立丘陵の周囲に横穴墓が巡る星隈横穴墓群が見られる。

さて、この今泉遺跡周辺は、『宇佐宮神領大鏡』によれば、1036年日田郡郡司大蔵氏の保証を得た日下部為行により開発された5箇所の別府のうちの一つと推定されている。この今泉別府は岳林寺からちょうど今泉1次調査区までの広範に及んでいたものと考えられる。その後、この地には後醍醐天皇の勅願を受けた大蔵永貞により、中国の帰化僧明極楚俊を開基として、岳林寺が康永元年（1342年）に創建される。その寺域は、現在岳林寺に残る徳川綱吉の時代に幕府に差し出した朱印状の控えが残存しており、この絵図から窺い知ることができる。これを見ると、背後に吹上台地を控え、東西に広がっており、西は花月川に張り出す尾根の崖面に現在も痕跡の残る、岳林寺創建の2年後の康永3年に彫造された片山磨崖種子、東は平安時代に造立された木造吹上観音坐像が祭られる現在の吹上神社までが当時の寺院の境内の範囲として推測されている。

《参考文献》

『朝日ヶ丘遺跡』　日田市埋蔵文化財調査報告書第18集　日田市教育委員会　2000年

『吹上遺跡Ⅱ』　日田市教育委員会　1981年

『吹上遺跡—第9次調査の概要報告』　日田市教育委員会　1999年

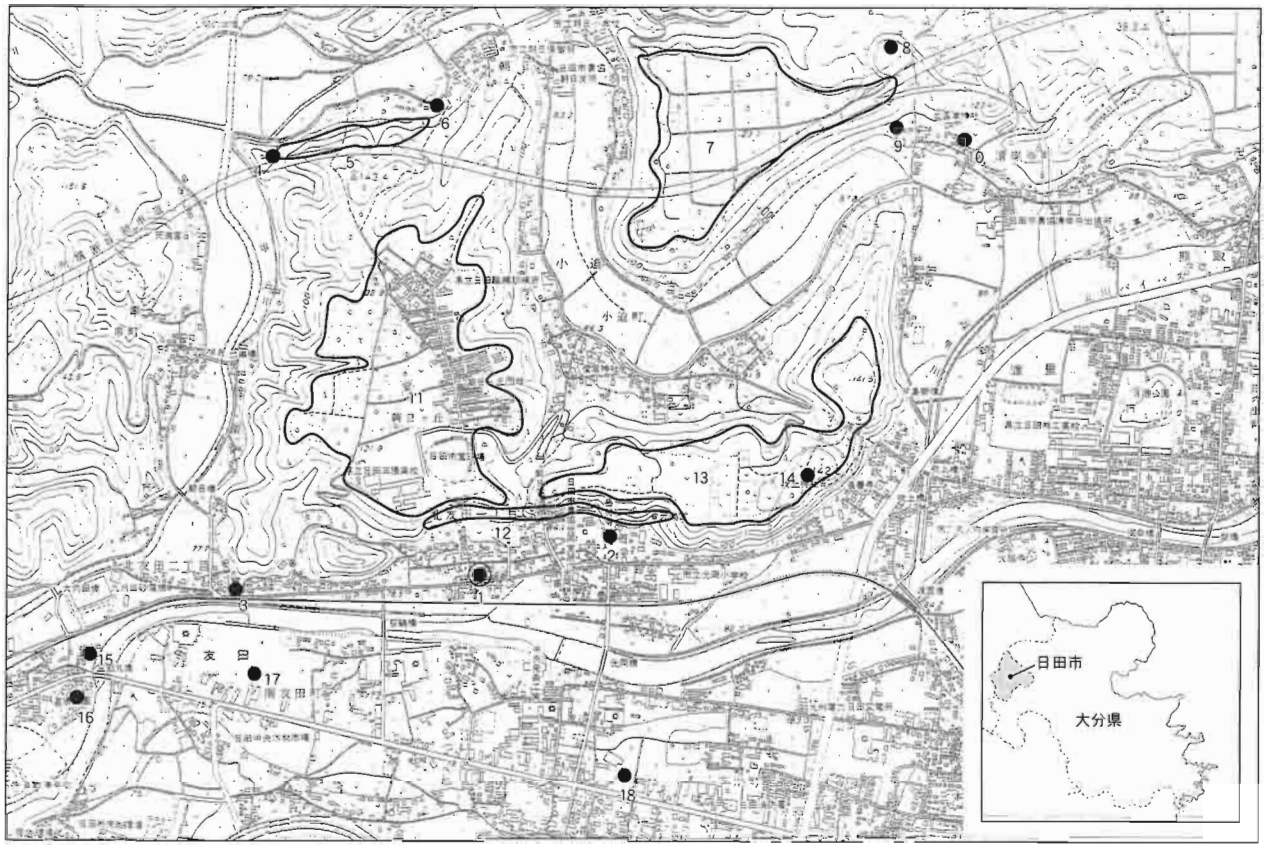
『吹上遺跡・天満古墳—範囲確認調査に伴う概要報告』　日田市教育委員会　2000年

『小迫辻原遺跡Ⅰ A・B・C・D区編』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書10　大分県教育委員会　1999年

『小迫辻原遺跡Ⅱ H区編　日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　日田市教育委員会　2000年

『草場第二遺跡』　九州横断道関係埋蔵文化財調査報告書（1）　大分県教育委員会　1989年

『本村遺跡2次、3次』「平成12年度日田市埋蔵文化財調査年報」　日田市教育委員会　2001年



0　500m

1.今泉遺跡	4.小迫古墳	7.小迫辻原遺跡	10.本村遺跡３次	13.吹上遺跡	16.星隈山横穴墓群
2.岳林寺	5.小迫墳墓群	8.草場第二遺跡	11.朝日ヶ丘遺跡	14.吹上神社	17.萩鶴遺跡
3.片山磨崖種子	6.尾部田遺跡	9.本村遺跡２次	12.北友田横穴墓群	15.三郎丸古墳	18.郷四郎遺跡

第７図　遺跡分布図（1/20000）

『郷四郎遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第 10 集　日田市教育委員会　1996 年

『荻鶴遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995 年

『平成 12 年度の埋蔵文化財保護事業　1．三郎丸古墳』「平成 12 年日田市埋蔵文化財調査年報」 日田市教育委員会 2001 年

『日田市史』 日田市　1990 年

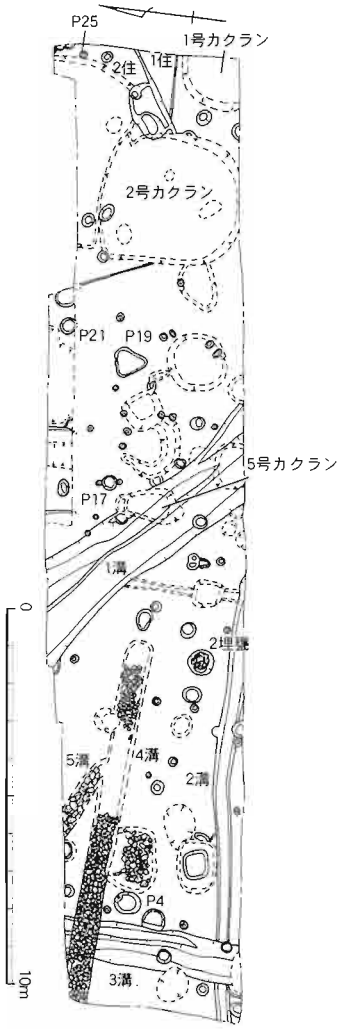
『日田市の歴史と文化財』 日田市教育委員会 1996 年

第Ⅲ章　調査の内容

第１節　調査の概要

調査区内の地形は全体的にほぼ平坦（標高 79.50m）であるものの、花月川のある南側へと緩やかに傾斜している。調査区の大半が撹乱を受けていたため、本来はもう 10 ～ 20 ㎝程度地山は高かったのではないかと思われる。調査区内での遺構検出面（地山）は淡黄褐色砂質土で現地表面から約 50 ～ 60 ㎝を測り、東側での堆積の殆どが撹乱によって残存していなかったため、堆積状況は不明であったものの、西側に一部残る層位から水田基盤層と考えられる黄褐色土層が見られたことから、１・２次調査区で得られたように水田として当地も利用されたものと推測される。また、この地山そのものも花月川の氾濫によって堆積した砂レキ層と考えられることから、調査区周辺は花月川が氾濫を繰り返しながら形成された地形と考えられる。

この地山を掘り込んで、竪穴住居跡２基、溝３条、ピット多数が検出された（第８図）。これらの大半が近年に建設された宅地の基礎などによって撹乱を受けており、４、５号溝などは河原石を充填しており、近年の住宅の基礎であったと考えられる。以下、これらの遺構とそこから出土した遺物について説明を加える。



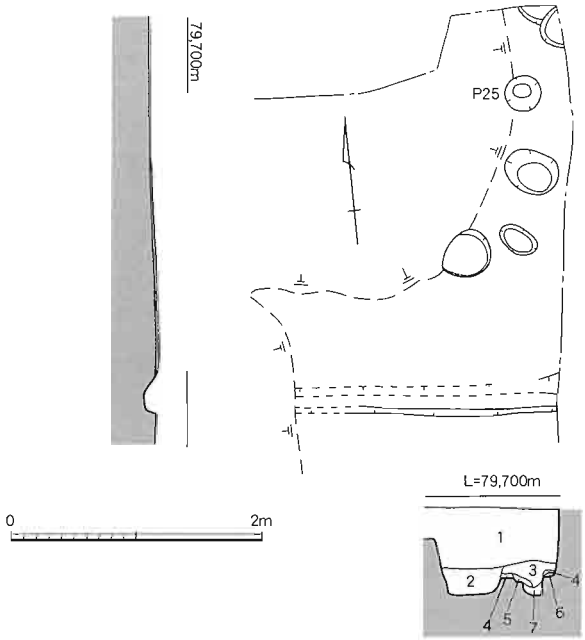
第８図　遺跡全体図（1/200）

第２節　遺構と遺物

１）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第９図）

調査区東端で検出され、大半が削平を受けており、特に西側は大きく撹乱される。撹乱と調査区との境に挟まれており、住居の全体像は不明である。ほぼ床面ぎりぎりが残存している状態であったが、当初２号竪穴住居跡との切り合いを誤り、一軒の住居跡としていたため、一部掘り過ぎてしまった。壁面沿いには浅い周溝が巡り、床面には黄褐色土の粘土による貼床が丁寧に施されていた。北東側の壁面に焼土が引っかかり、その手前に袖石の抜き取り痕らしき柱穴が見られたことから、カマドの可能性が考えられ、北側にカマドを持つ住居跡と推測される。遺構の中からは遺物の出土は殆どなく、時期の判別は困難であるものの、須恵器の破片などが見られ（写真３）、また、Ｐ 25 は撹乱により住居跡に伴うか不明であるものの須恵器の蓋が出土していることから、この住居跡は、少なくとも古墳時代以降のものと考えられる。



1．近代攪乱層
2．明治期の攪乱層
3．淡灰褐色土、焼土ブロック混
4．焼土ブロック層（カマド床面）
5．暗黒褐色土、塁・焼土多く含む
6．炭層
7．淡黒色土
※5,6層はピットの埋土であるが、焼土ブロックが混じり、住居廃棄後にすぐに掘られたような状態であることから、カマド袖石抜取り痕の可能性が考えられる。

第９図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

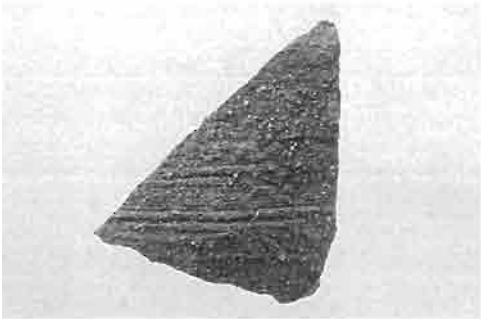


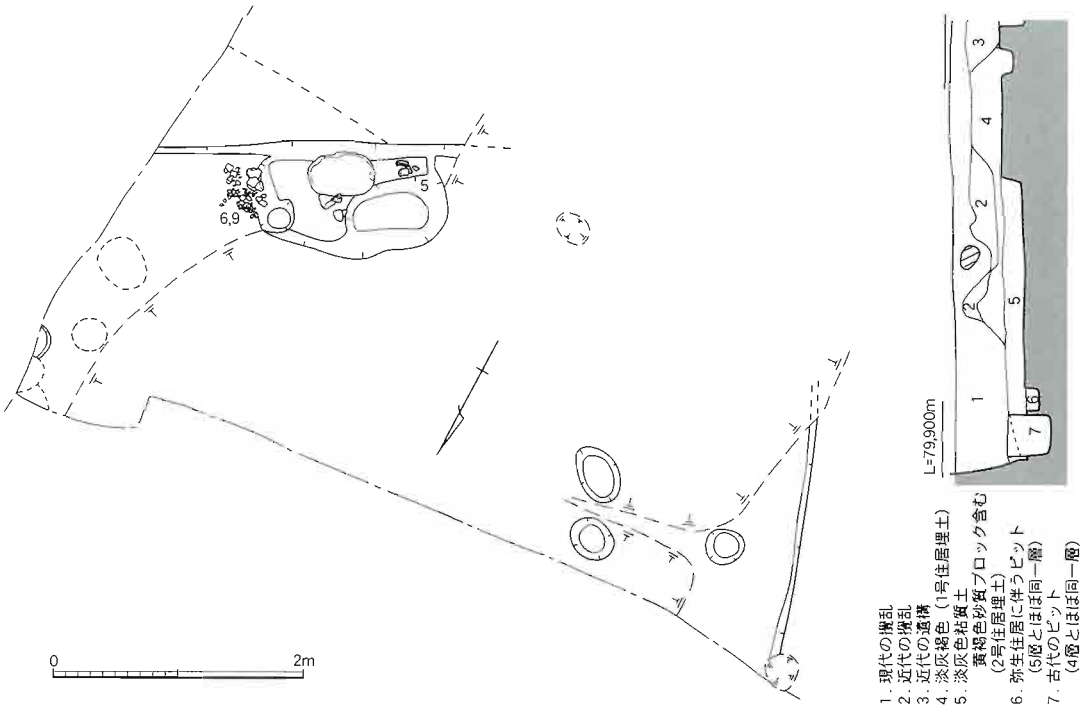
写真３　１号住居跡出土土器

２号竪穴住居跡（第 10 図）

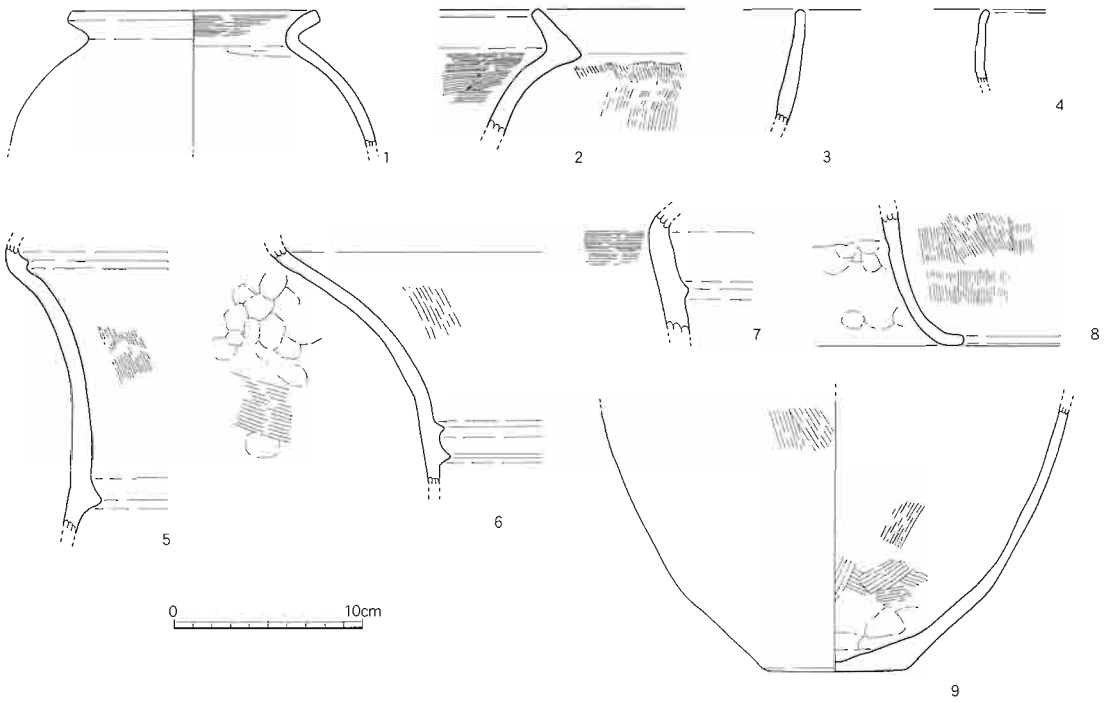
調査区東端で検出され、大半が削平を受けており、特に西側は大きく攪乱される。１号竪穴住居跡に切られる住居跡で、検出面からの深さ約 15 ㎝を測り、攪乱のため不明であるが、北西側に一部壁面が検出されたことから方形プランを呈するものと思われる。南側には南面土坑が確認されたが、中心部の大半が攪乱を受けていたため、本来あったであろう主柱穴や炉跡は確認できなかった。また、南面土坑には当時住居跡で使用していたと考えられる長さ約 55 ㎝、幅約 30 ㎝の磨石が流れ込んでいた。この南面土坑周辺にはいくつかの土器がかたまって検出され、これらは殆どが浮いた状態であったことから、使用時のものではなく、廃棄時のものではないかと考えられる。

２号竪穴住居跡出土遺物（第 11 図）

１は甕である。頸部をすぼませてくの字状に外傾させて、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は平滑に仕上げられる。内外ともにナデと思われるが、口縁部外面には横ハケが施され、頸部屈曲部は工具によるナデが施される。２は複合口縁壺の口縁部破片である。口縁部はやや外反し、逆くの字状に内傾し、やや緩やかに内湾する。口縁端部は平滑に仕上げられる。外面は縦ハケが施され、内面には横ハケが施される。３は短頸壺の口縁部である。ほぼ直立し、緩やかに内湾する。内外にやや指頭圧痕が残る。４は小型の壺の口縁部でほぼ直立し、端部はやや外反する。内外ともにナデで、外面は丹塗り調整である。５は甕の胴部破片で、胴部に断面三角形の突帯を１条、頸部に断面三角形の突帯を１条巡らせる。外面に一部縦ハケが残存する。６は甕の頸部破片で胴部に断面三角形の突帯を２条巡らせる。外面はハケ後ナデが施され、内面には指頭圧痕が残り一部ハケ調整が施される。胴部上半に丹塗り調整が見られる。７は甕の頸部破片で、頸部屈曲部下部に断面三角形の突帯が１条巡る。内面には横ハケが施される。８は高坏の脚部で緩やかに広がり、端部付近で屈曲する。脚端部は平滑に仕上げる。外面には縦ハケが施され、内面には指頭圧痕が残る。９は

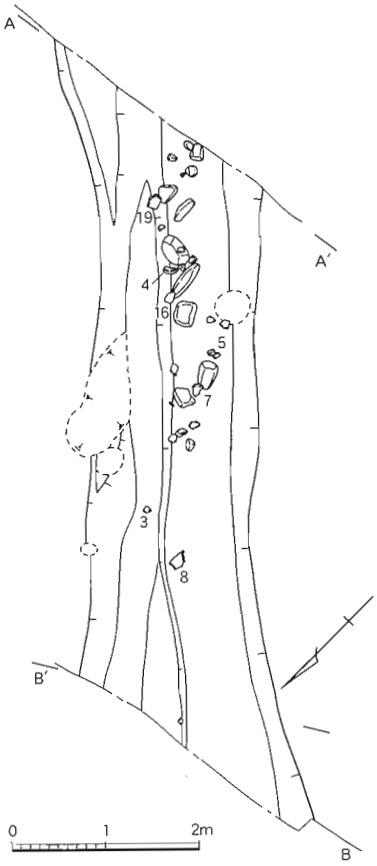


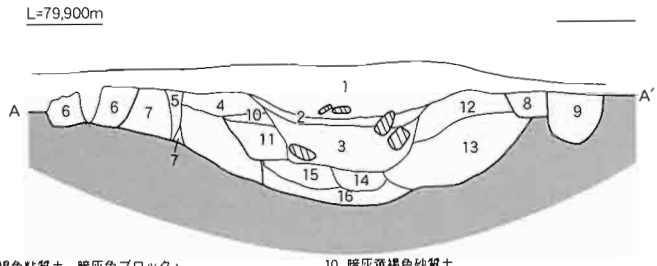
第 10 図　2 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 11 図　2 号住居跡出土遺物実測図（1/4）

甕の底部破片で、底部はややレンズ状を呈する。外面には縦ハケが施され、内面底部には指頭圧痕が残り、胴部にかけてハケ調整が施される。胴部下半には黒斑が見られる。

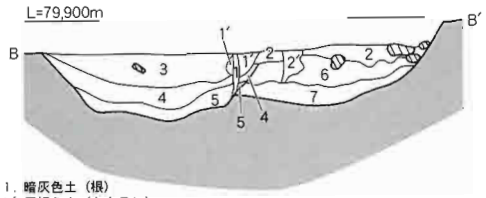




1．黒褐色粘質土、暗灰色ブロック
　バラス、焼土等を大量に含む
2．暗黄褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．黒色粘質土、焼土等を含む
　黄褐色粘質ブロック混
5．暗灰褐色土、ややしまりなし
　黄褐色粘質ブロック混
6．暗褐色粘質土
7．淡黒褐色粘質土、炭、黄褐色砂質ブロック混
8．暗褐色粘質土
9．淡黒褐色粘質土、黄褐色砂質ブロック混

カクラン

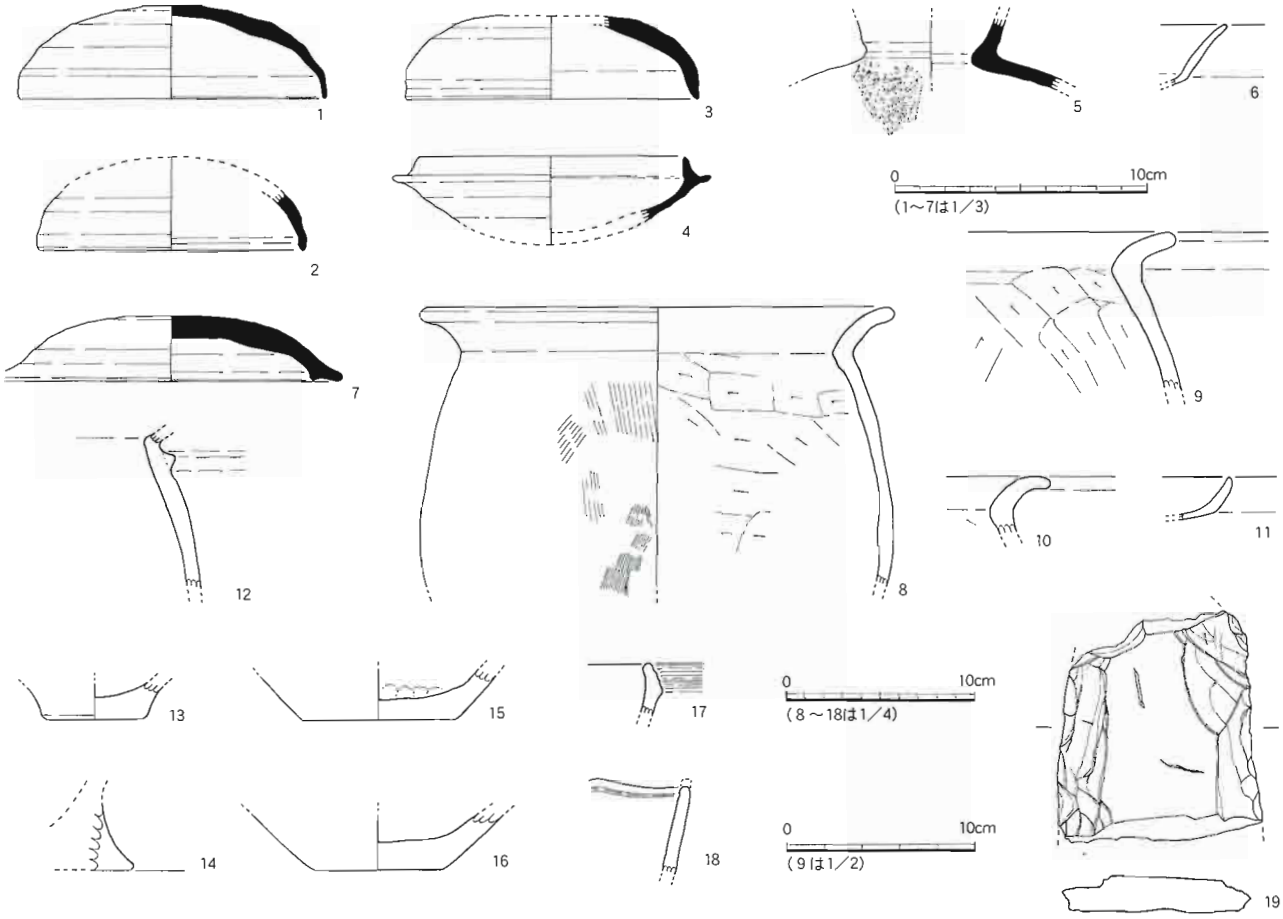
10．暗灰黄褐色砂質土
11．暗灰褐色土
12．暗褐色砂質土、黄褐色砂質ブロック混
13．暗灰褐色土、褐色カーボン粒子混
14．灰褐色土砂質土
15．暗黄褐色砂質土
16．暗灰黄褐色砂質土、暗褐色カーボン粒子混、鉄分溶着粒子混
17．暗褐色砂質土、黄褐色砂質土少量混
※7層は1号溝の最も古い埋土の可能性があるが、
　攪乱のためはっきりしない。
　17層が下層の溝、10～16層は上層の溝の埋土で、
　13層はあるいは溝が掘りなおされた際の埋土の可能性がある。



1．暗灰色土（根）
1′．灰褐色土（カクラン）
2．灰色土（カクラン）
2′．灰褐色土（カクラン）
3．灰黒褐色土礫を含む
4．淡黒褐色土、暗灰色粘質土若干混
5．暗灰色粘質土、暗褐色土ブロック混、鉄分沈殿
6．暗褐色土、灰色ブロック混
7．暗灰褐色粘質土、暗褐色ブロック混、鉄分沈殿
※4,5層は溝の自然堆積層で、3層は埋没時の埋土。

0　1m

第 12 図　1号溝実測図（1/40 、 1/80）



第 13 図　1号溝出土遺物実測図（1/2 、 1/3 、 1/4）

2）溝

計５本の溝が検出されたが、４、５号溝に関しては近代のものと判断したため報告を除外している。

１号溝（第 12 図）

調査区中央で検出された溝で、北西方向から南東方向に流れる。当初、１条の溝であると考えていたが、中央部が段差を持ち一段下がることと土層観察から、２条の溝が切り合っていると判断した。調査区北西側の土層では溝は一部を切りあう状態で、１～５層までと６、７層とに分けられる。南東側の土層では大部分が上層の溝によって切られるように重なっており、１０～１６層と１７層とに分けられる。また、これらは水路であったと考えられ、北東側の土層５、７層に鉄分の沈殿が確認され、地山にも鉄分の溶着が著しく見られた。上層の溝は幅約１１0cm、深さ約 40 ㎝、下層の溝は深さ約 30 ㎝を測り、どちらも浅いＵ字状を呈する。それぞれの溝から出土した遺物から下層は６世紀後半、上層は７世紀中頃～後半に属するものと思われる。

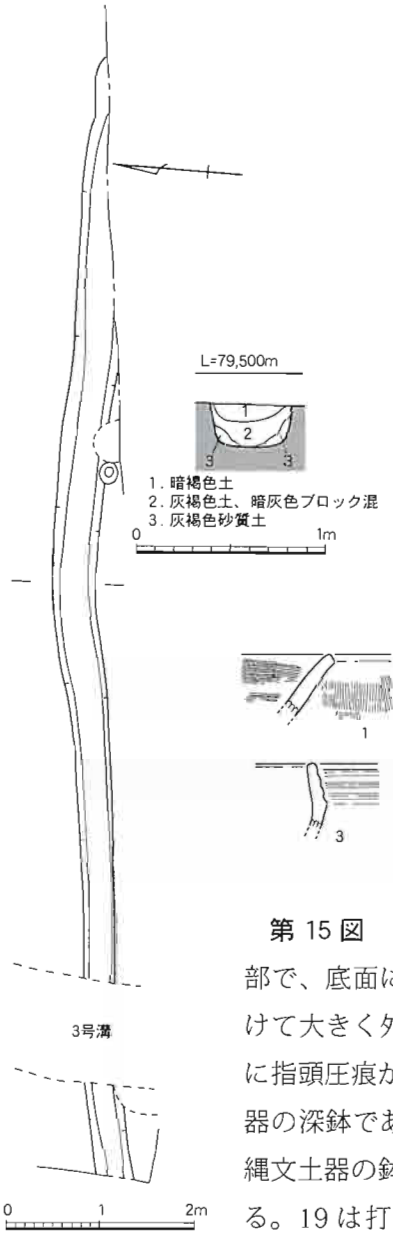
１号溝出土遺物（第 13 図）

１号溝からの出土遺物はその殆どが溝一括で取り上げを行ったため、上層と下層との区別を行っていない。しかし、流れ込みと考えられる縄文時代、弥生時代の遺物を除くと、概ね６世紀後半と７世紀中頃～後半に区別が出来る。これらは出土状況を一部押さえた４、８などの遺物の状況とも一致しており、１号溝の上層と下層の溝とで時期区分が可能であると判断し、下層、上層、流れ込みと区分して説明を加える。

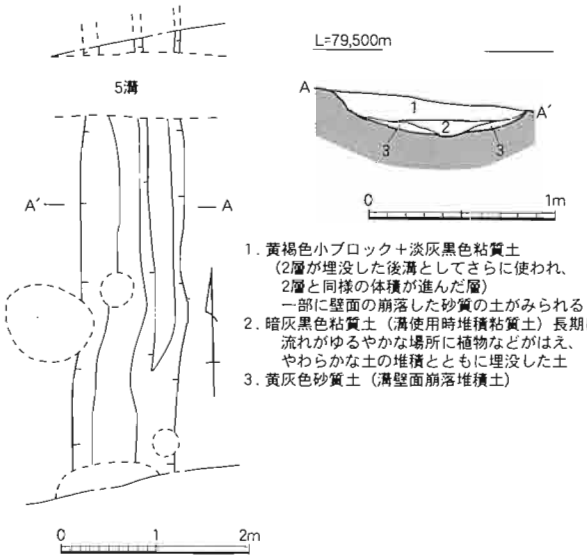
１～６は下層の溝に帰属すると考えられる。１は須恵器の蓋で、口縁部にかけて緩やかに屈曲し、稜を持って折れ曲がる。内外面回転ナデで、外面天井部にかけて回転ヘラケズリが施される。２は須恵器の蓋である。やや径が小さく、口縁部にかけて緩やかに内傾し、端部はやや肥厚し、丸みを持つ。３は須恵器の蓋で、口縁部にかけて緩やかに屈曲し、稜を持って折れ曲がる。端部はやや外反し、比較的厚みを持つ。内外面回転ナデで、外面天井部にかけて回転ヘラケズリが施される。４は須恵器坏で、明瞭なかえりを持ち、受け部はやや上方に伸び、口縁部は緩やかに内傾して立ち上がる。内外ともに回転ナデが施されるが、外面底部にかけては回転ヘラケズリが施される。５は平瓶の頸部破片か。内外回転ナデが施されるが、外面頸部付近にヘラ記号が施される。６は土師器高坏である。頸部に段を持ち、口縁部は緩やかに外反する。

７～11 は上層の溝に帰属すると考えられる。７は須恵器の蓋で、器壁が厚みを持ち口縁部にかけて緩やかに丸みをもつ。受け部は外面に張り出し、口縁部は受け部からやや凹みをもち、若干立ち上がる。内外ともに回転ナデが施される。８は土師器の甕の口縁部である。頸部に明瞭な屈曲を持ち、胴部はやや張り出す。口縁部は外傾し、口唇部にかけて緩やかに外反する。外面は胴部に縦ハケが施され、頸部付近にかけては幅２～3mm 程度、胴部下半には１㎜程度のハケ目が施される。内面は横方向のケズリが施され、頸部屈曲部を明瞭に削出する。９は土師器甕の口縁部で、やや頸部付近が肥厚し、口縁部は外反する。内面には縦方向のケズリが施される。10 は土師器甕の口縁部で口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや下方に垂れ下がる。内面頸部付近にはケズリが施される。11 は土師器の椀か。頸部に稜を持ち、口縁部は緩やかに立ち上がる。

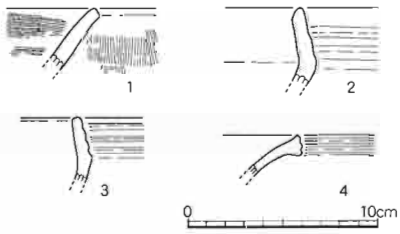
12 から 19 は流れ込みの遺物と考えられ、縄文時代後期～弥生時代後期までの遺物が含まれる。12 は弥生土器の甕の頸部破片で、頸部に断面三角形の突帯が巡らされる。13 は弥生土器の甕の底



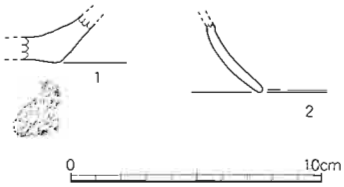
第 14 図　2 号溝実測図（1/40 、1/80）



第 16 図　3 号溝実測図（1/40 、1/80）



第 15 図　2 号溝実測図（1/4）



第 17 図　3 号溝出土遺物実測図（1/3）

部で、底面にかけてやや張り出す。14 は弥生土器の甕の底部で、底面にかけて大きく外に張り出す。15 は弥生土器の甕の底部で平底を呈する。内面に指頭圧痕が残る。16 は弥生土器の甕の底部で平底を呈する。17 は縄文土器の深鉢である。波状口縁を呈し、口縁部内面に沈線文が施される。18 は縄文土器の鉢である。口縁部外面に文様帯を削出し、3 条の沈線文が施される。19 は打製石斧である。刃部、基部を欠損する。結晶片岩製である。13 、14 は弥生時代前期末～中期初頭、12 、15 、16 は中期末から後期、17 ～ 19 は縄文時代後期から晩期に属すると考えられる。

2 号溝（第 14 図）

調査区南西端で検出された溝で、調査区内を西から東へと流れる。3 号溝に切られる。幅約 40cm 、深さ約 20cm を測り、断面台形を呈する。溝埋土は堆積状況を示し、溝の底面付近には壁の崩落の痕跡も見られた。出土遺物は流れ込みのもの破片が多いものの、一部弥生土器の破片が見られたことから弥生時代に属するものと考えられる。

2 号溝出土遺物（第 15 図）

1 は弥生土器の甕の口縁部で、緩やかに外反する。外面には縦ハケが施され、内面には横ハケが施される。2 は縄文土器の深鉢である。口縁部に文様帯が削出され、2 本の沈線文が施される。内面には貝殻条痕が施される。3 は縄文土器の鉢である。文様帯が削出され、3 本の沈線文が施され

る。内面には貝殻条痕が施される。4は縄文土器の浅鉢である。口縁部は外反し、口縁端部を肥厚させて文様帯を削出し、2本の沈線文が施される。

3号溝（第16図）

調査区西端で検出された溝で、調査区内を北から南へと流れる。北側は5号溝に削平を受ける。検出面での幅約100cm、深さ約20cmを測り、断面は浅いU字状を呈する。埋土の堆積は自然堆積を呈し、底面付近には鉄分の沈殿も確認された。

3号溝出土遺物（第17図）

1は土師器皿の破片である。内外回転ナデが施され、底面は糸切りである。2は土師器高坏の破片であある。底面にかけて緩やかに外反し、脚半部に稜を持つ。

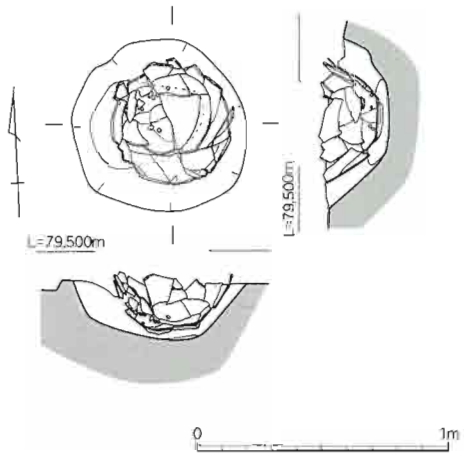
3）その他の遺構

1号埋甕（第18図）

調査区南西にて検出された遺構で、近代の所産であると考えられる。掘方は約70cmの不整円形を呈し、深さ約20cmを測る。断面径は浅いU字状を呈している。埋甕は上半部が削平のため破損した状態で、底部のみ残存していた。平底の底部を持ち、内外に茶褐色の釉がかかる。甕の内部にはビー球やスプーン、釘などが入っており、子供のおもちゃ箱が収められていたのではないかと思われる。土地の所有者の話では、この甕の付近まで旧宅が建てられていたとのことであり、当初この甕は厠として利用されていたのではないかと考えられる。その後、この甕が厠として利用されなくなった際に子供のおもちゃの収納場所として利用されたのではないだろうか。

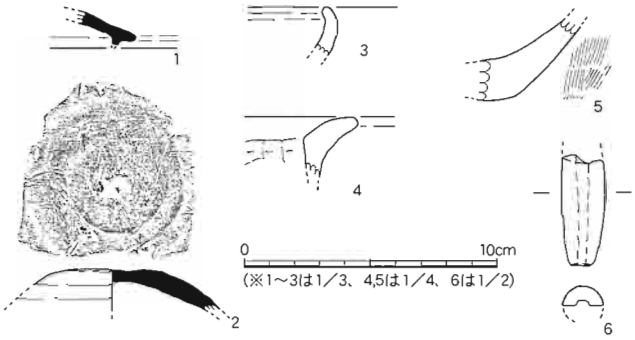
柱穴（第8図）

調査区内から多数の柱穴が検出されたものの、建物等になるものは見られず、大半が攪乱と考えられるが、そのうちの幾つかから遺物の出土が見られた。

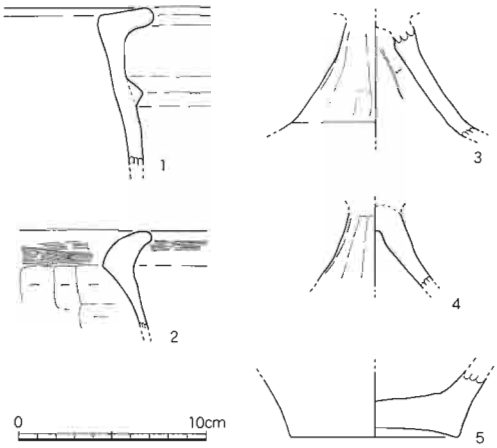


第18図　1号埋甕実測図（1/30）

写真4　埋甕出土状況



第 19 図　柱穴出土遺物実測図（1/3 、 1/4）



第 20 図　その他の出土遺物（1/4）

柱穴出土遺物（第 19 図）

1はＰ 4から出土した須恵器蓋の破片で口縁部にかえりを持つ。2は P25 から出土した須恵器坏の破片である。天井部にヘラ記号を持つ。3は P19 から出土した土師器椀の破片か。口縁部は内湾する。4は P21 から出土した土師器甕である。頚部はやや肥厚し、内面に横方向のケズリを持つ。5は P17 から出土した土師器甕の底部破片で、外面ハケ調整である。6はＰ 4から出土した土錘である。

その他の遺物（第 20 図）

調査区内では多数の攪乱が見られたが、攪乱によってはそれぞれの遺構に伴う可能性があるため、出土した遺物を一括して紹介する。

1は 2 号攪乱より出土した弥生土器の甕の口縁部である。頚部に断面三角形の突帯が巡る。2は 5 号攪乱より出土した土師器甕の破片で、頚部は肥厚している。外面ハケ、内面ケズリが施される。3は 5 号溝から出土した土師器高坏である。4は 1 号攪乱より出土した土師器高坏である。5は 5 号溝より出土した弥生土器の底部である。やや上げ底を呈する。

第Ⅳ章　まとめ

今泉遺跡の調査成果について以下にまとめる。

今回の調査では主に弥生時代の竪穴住居跡１軒、溝１条、６世紀後半、７世紀中頃～後半の溝２条、古墳から古代の竪穴住居跡１軒、中世以降の溝１条が検出され、今泉遺跡では少なくとも弥生時代以降、この地に集落が営まれていたことが明らかとなった。また、周辺部からの流れ込みと考えられる遺物は遺構の時期とは異なり、縄文時代後期～晩期、弥生時代前期末～中期初頭に属しており、この一帯の沖積地の利用が検出された遺構の時期以前に遡る可能性が高いことを示している。これまでのこの一帯の遺跡の調査は主に台地上に偏っていることが多く、沖積地の利用状況については殆ど明らかになっていなかった。特に、今泉などの狭い沖積地は中世以降の水田開発以前は利用されていないものと推測されていたが、今回の調査成果は、水辺での集落の動向及び、台地上の集落との関係を探る上で貴重な成果を提示する事となったといえる。２号竪穴住居跡の時期が弥生時代後期前半～中頃に属し、また周辺部には前期末の遺跡の存在も示唆されるなど、弥生時代の大規模集落である吹上遺跡との関係を考える上でも興味深い。また、６世紀後半、７世紀中頃～後半に属する溝と竪穴住居跡の存在は、台地崖面に立地する北友田横穴墓群の被葬者の集落の存在を示すものと考えられ、横穴墓の被葬者の集落が横穴墓近辺に立地する日田市内での傾向とも一致している。

さて、中世以降の時期であるが、この一帯は第Ⅱ章で述べたように今泉別府として、水田開発が行われた地域であり、その後の岳林寺の境内に属する地域である。今回の３次調査では遺構面が大きく攪乱を受けていたため水田開発状況については明らかにできなかったものの、１、２次調査の成果から古代以降の水田層の痕跡が認められ、『宇佐宮神領大鏡』に見られる今泉別府の開発と符号する成果と考えられる。しかし、１、２次及び、今回の３次調査では、水田開発から岳林寺の創建に至るまでの状況を明らかにすることは出来なかった。この点については今後の調査の課題といえよう。

註釈）

１．『吹上遺跡―第９次調査の概要報告』　日田市教育委員会　1999 年

『吹上遺跡・天満古墳―範囲確認調査に伴う概要報告』　日田市教育委員会　2000 年

『吹上遺跡Ⅱ』　日田市教育委員会　1981 年

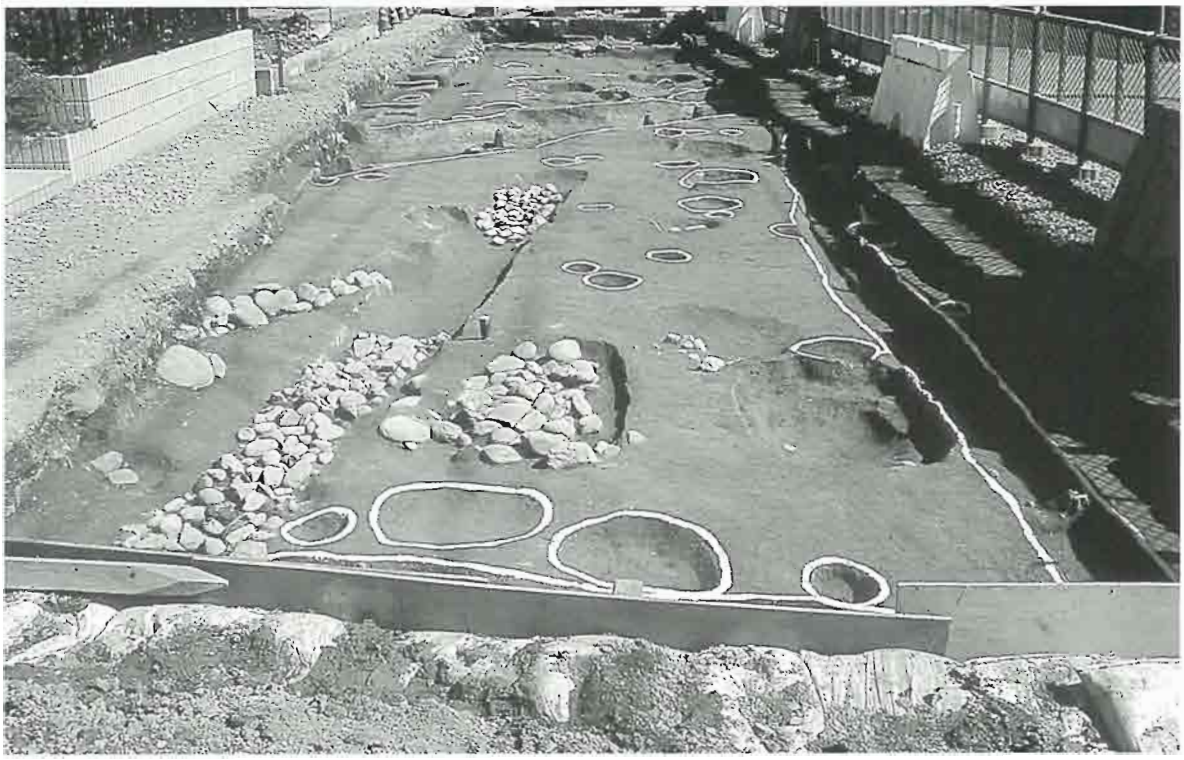
２．『日田市史』　日田市　1990 年

表1　出土遺物観察表

※胎土は略記号を用いる
A・石英、B・長石、C・角閃石、D・雲母、E・赤色粒子、F・白色粒子、G・黒色粒子

図版	番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)（　）は復元径・残存高			胎土	焼成	色調
					口径	底径	器高			
第5図	1	1次調査区	青磁	碗		(4.9)				淡緑黄色
	2	1次調査区	須恵器	碗				A.F	良好	暗紫灰色
	3	1次調査区	須恵器	甕				A.H	良好	淡灰色
	4	1次調査区	土師器	坏		(10.5)		A.B.C.E	良好	淡茶褐色
	5	1次調査区	須恵器	高坏か				A.F	良好	青灰色
	6	2次調査区	須恵器	蓋				A.F	良好	淡青灰色
	7	2次調査区	須恵器	蓋				A	良好	暗灰色土
	8	2次調査区	須恵器	蓋				A.F	良好	暗青灰色
	9	2次調査区	須恵器	坏				A.B	良好	淡青灰色
	10	2次調査区	須恵器	坏				A	良好	淡青灰色
	11	2次調査区	須恵器	坏				A.H	良好	淡青灰色
	12	2次調査区	須恵器	坏		(8.9)		A	良好	青灰色
	13	2次調査区	須恵器	高坏				A.F	良好	淡黒灰色
	14	2次調査区	須恵器	甕				A.B.F	良好	淡青灰色
	15	2次調査区	土師器	椀		(7.6)		A.D.	良好	淡黄灰色
	16	2次調査区	陶磁器	皿	(9.8)	(3.2)	3.5	精良	良好	灰白色
第11図	1	2号住	土師器	甕	13.4			A.B.C.D	良好	淡黄褐色
	2	2号住	弥生	壺				A.B.C.E	良好	淡黄褐色
	3	2号住	弥生	壺				A.B.C.E	良好	淡黄褐色
	4	2号住	弥生	壺				A.B	良好	淡黄褐色
	5	2号住	弥生	甕				A.B.C.E	良	淡黄褐色
	6	2号住	弥生	壺				A.B.C.D.E	良好	淡黄褐色
	7	2号住	弥生	甕				A.B	良好	淡黄褐色
	8	2号住	弥生	高坏				A.B.C	良好	淡黄褐色
	9	2号住	弥生	甕		7.4		A.B.C.D	良好	淡黄褐色
第13図	1	1ミゾ	須恵器	蓋	(11.0)		3.7	A.B.C.D.E		
	2	1ミゾ	須恵器	蓋	10.5			A.B	良好	青灰色
	3	1ミゾ	須恵器	蓋	(11.4)			A.B	良好	暗青灰色
	4	1ミゾ	須恵器	坏	(10.3)	12.5		B	良好	青灰色
	5	1ミゾ	須恵器	平瓶				A.B	良好	青灰色
	6	1ミゾ	土師器	高坏				B	良好	淡赤褐色
	7	1ミゾ	須恵器	蓋	(13.5)		2.6	A.B	やや良好	灰白色
	8	1ミゾ	土師器	甕	25.0			A.B.C.D	良好	淡黄褐色
	9	1ミゾ	土師器	甕				A.B.C.D.E	良好	淡黄褐色
	10	1ミゾ	土師器	甕				A.B.C.D	良好	淡黄褐色
	11	1ミゾ	土師器	椀				A.B.C	良好	淡赤褐色
	12	1ミゾ	弥生	甕				A.B.E	良好	淡黄褐色
	13	1ミゾ	弥生	甕		5.4		A.B.C	良好	赤褐色
	14	1ミゾ	弥生	甕				A.B.C	良好	淡赤褐色
	15	1ミゾ	弥生	甕				A.B.C	良好	淡赤褐色
	16	1ミゾ	弥生	甕		6.7		A.B.C	良好	淡黄褐色
	17	1ミゾ	縄文	深鉢				A.B.C	良好	淡黄褐色
	18	1ミゾ	縄文	深鉢				A.B.C.D	良	暗黄褐色
第15図	1	2ミゾ	弥生	甕				A.B.C.E	良好	赤褐色
	2	2ミゾ	縄文	深鉢				A.B.C.D	良好	暗黄褐色
	3	2ミゾ	縄文	深鉢				A.B.C	良好	淡黄褐色
	4	2ミゾ	縄文	浅鉢				A.B.C.D	良好	暗黄褐色
第17図	1	3ミゾ	土師器	皿				A.B.C.D	良好	淡赤褐色
	2	3ミゾ	土師器	高坏				B.D	良好	淡赤褐色
第19図	1	P-4	須恵器	蓋				A.B	良好	青灰色
	2	P-19	土師器	椀				B.D	良好	淡黄褐色
	2	P-25	須恵器	蓋				A.B	良好	青灰色
	4	P-21	土師器	甕				A.B.C.D	良好	淡赤褐色
	5	P-17	土師器	甕				A.B.C.	良好	淡赤褐色
	6	P-4	土師器	土錘	巾1.1	長2.9	厚0.5	B	良好	淡灰褐色
第20図	1	2カクラン	弥生	甕				A.B.D	不良	淡赤褐色
	2	5カクラン	土師器	甕				A.B.C.D	良好	淡黄褐色
	3	5ミゾ	土師器	高坏				B.E	良好	淡赤褐色
	4	1カクラン	土師器	高坏				A.B	やや不良	淡赤褐色
	5	5ミゾ	弥生	甕		(7.8)		A.B.C.D	良好	淡黄褐色

写　真　図　版



①調査区全景（東から）

② 1 号竪穴住居跡

③ 1 号住居カマド土層

④ 2 号竪穴住居跡

⑤ 2 号竪穴住居跡遺物出土状況

図版 2

①２号竪穴住居跡土層

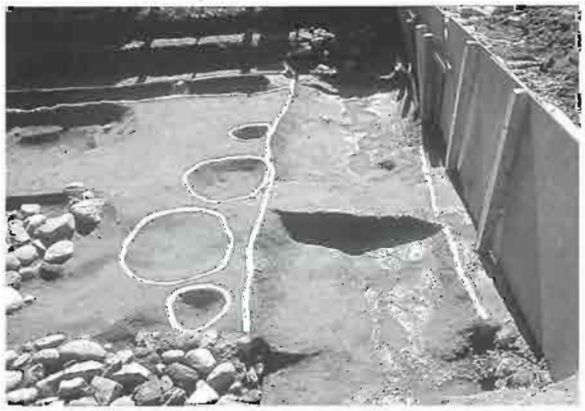
②１号溝

③１号溝北壁土層

④１号溝南壁土層

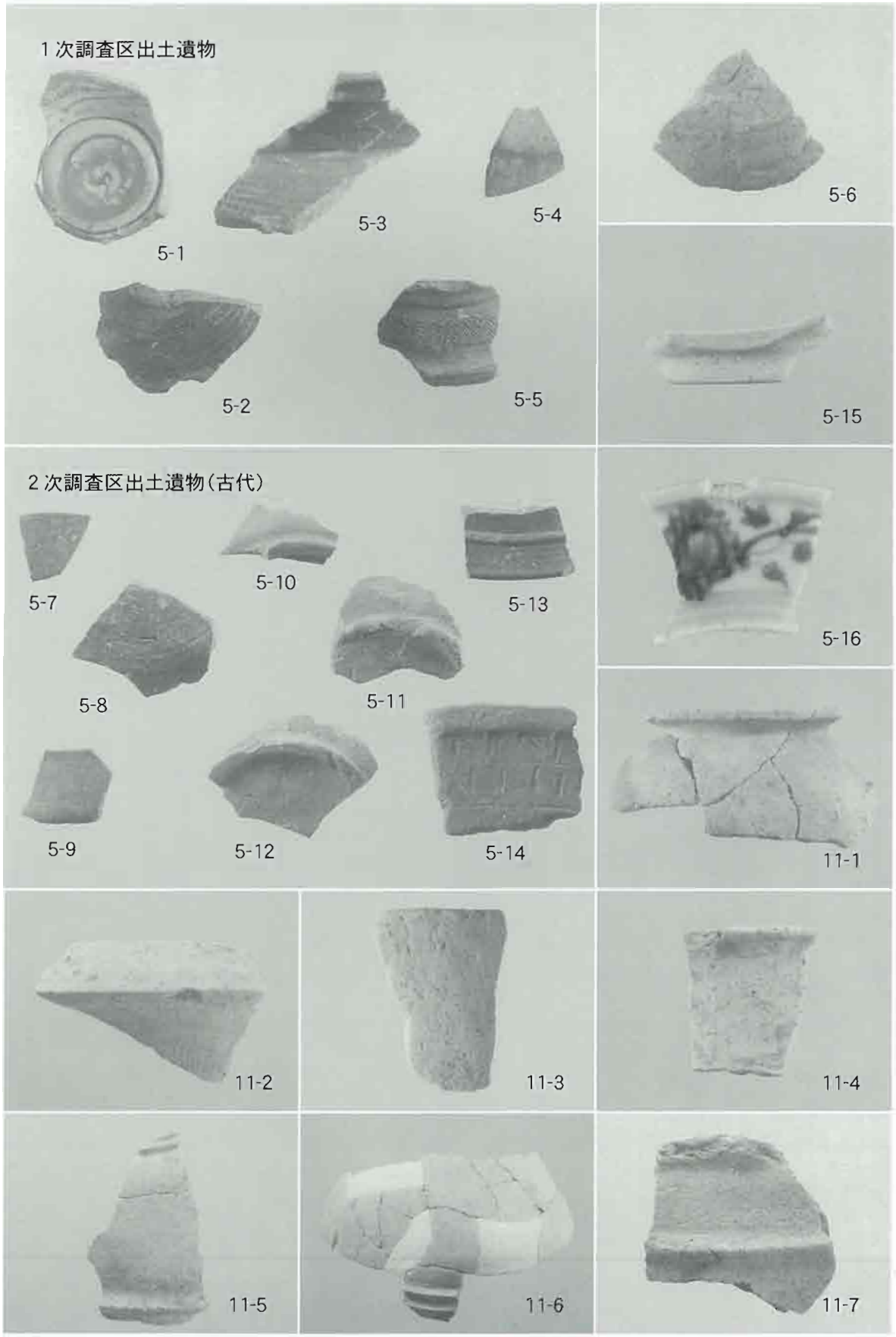
⑤２号溝

⑥２号溝土層



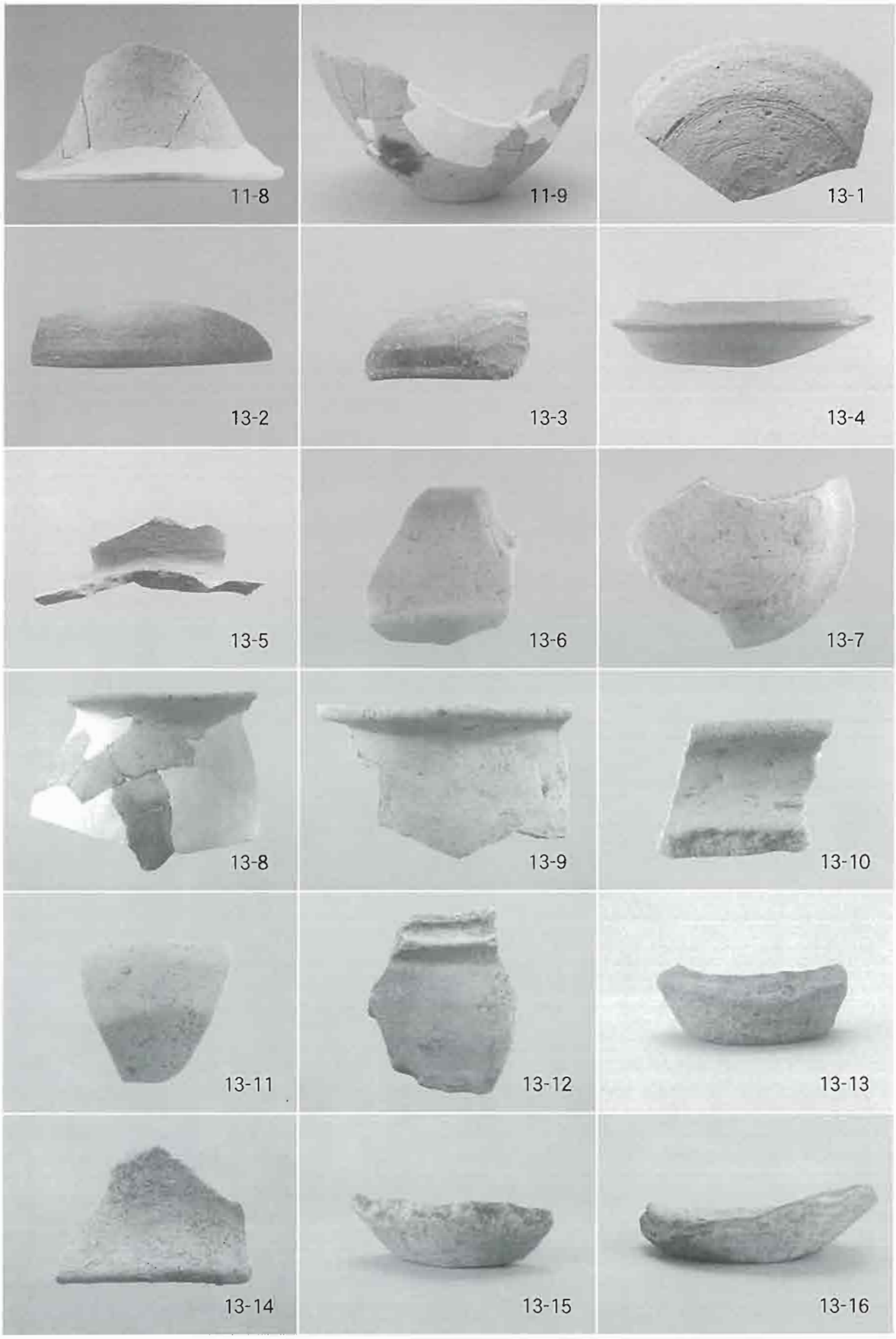
⑦３号溝

⑧３号溝土層

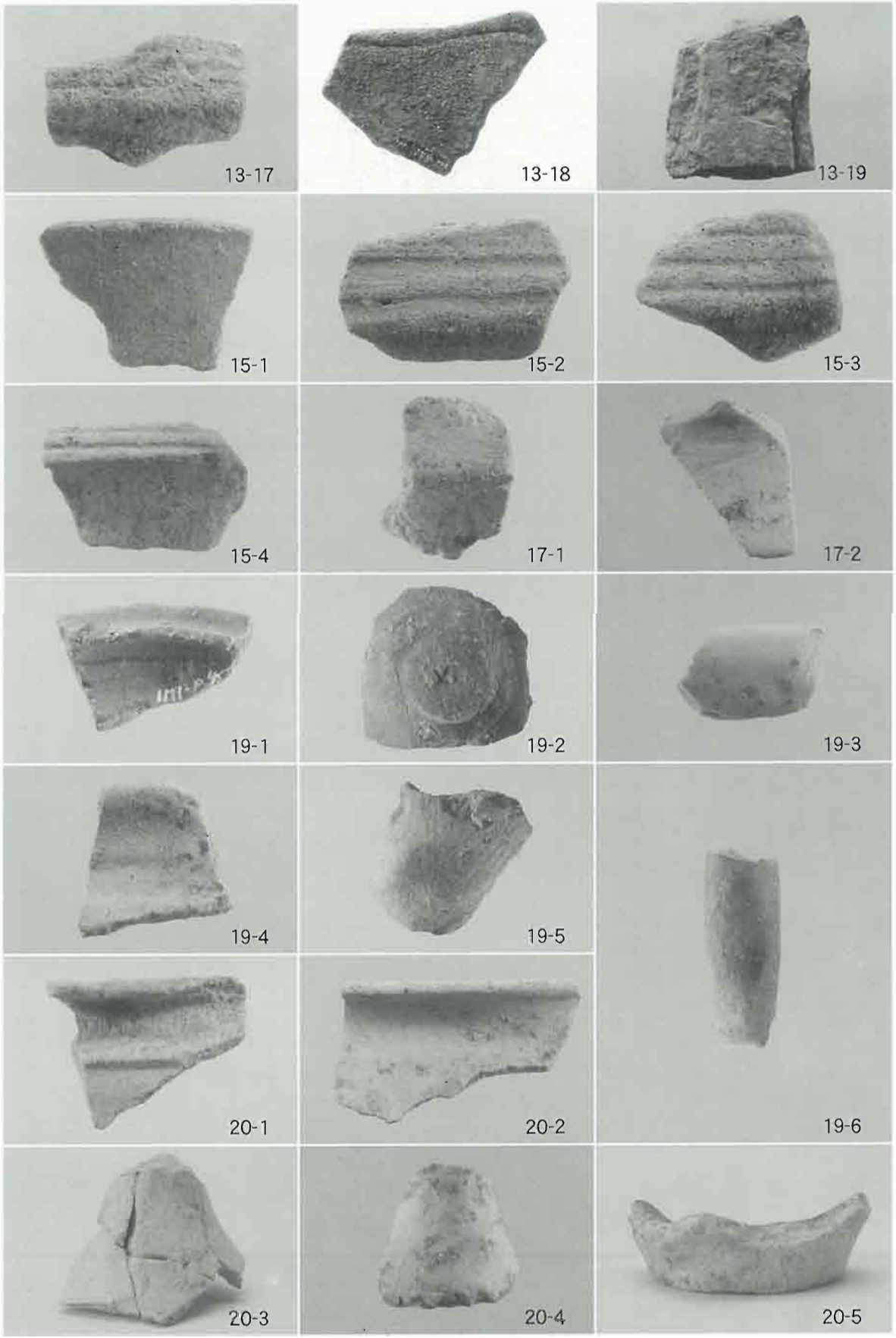


※遺物の番号は全て挿図番号と一致する。（第 1 図の 1 は 1 - 1 と標記する。）

図版４



※遺物の番号は全て挿図番号と一致する。（第１図の１は１－１と標記する。）


13-17
13-18
13-19
15-1
15-2
15-3
15-4
17-1
17-2
19-1
19-2
19-3
19-4
19-5
19-6
20-1
20-2
20-3
20-4
20-5

報 告 書 抄 録

ふりがな	いまいずみいせき
書名	今泉遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	渡邉隆行
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまいずみいせき 今泉遺跡	おおいたけんひたしおおあざ 大分県日田市大字 ともだいまいずみ 友田今泉	44204-6	651092			20011009 ～ 20011031	200	道路拡幅

所用遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
今泉遺跡	集落	弥生～古代	竪穴住居跡　2軒 溝　3条	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器	

今泉遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第３７集
平成１４年３月２９日

発　行　日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印　刷　日田時報紙器印刷株式会社
大分県日田市二串町345-3